

『如実論』について

小 野 基

真諦 (Paramārtha) 訳『如実論反質難品』(大正蔵 32 卷 no. 1633 = 『如実論』) は、梵文原典も蔵訳も伝わらず部分訳の可能性さえ指摘されているが、陳那 (Dignāga, ca. 480-540) 以前の仏教論理学の思想史を跡づける上で貴重な典籍である。同書は因明学の主流では左程研究されなかった模様だが、近代になって改めて注目され、諸碩学により研究された。しかし近年の桂紹隆博士グループによる *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (= PST) 第 3・4・6 章梵文原典研究やエリ・フランコ博士による Spitzer 写本の解明は、陳那以前の仏教論理学の理解に新たな光を投げかけている。本稿では、それらを顧慮しつつ、『如実論』の思想史的な位置づけを再考したい。

1. 『如実論』の原題

『如実論』の梵語題名に関しては 1290 年成立の『至元法宝勘同総録』の『如実論』の項目に「怛囉_{二合}迦沙悉特囉」と漢字音写が記載されていることが議論の出発点となる。南条文雄博士は、この記述に従って英訳『大明三蔵聖教目錄』で『如実論』に *Tarka-sāstra* という梵語名を充てた。これは漢訳名以上にこの論書の内容に良く合致するものと言えるが、『至元録』で『如実論』に付せられた *tarkaśāstra* という名称は、特定の論書を表わすというより、討論術・論理学の書一般を表わす普通名詞として原題が不明な『如実論』に仮に充てられたものと見られる。

一方、インド撰述の仏教論理学文献に *tarkaśāstra* への言及がある。ジュゼッペ・トゥッチ博士は陳那の *Pramāṇasamuccayaṅgī* (= PSV) の蔵訳に *tarkaśāstra* に当たる語が現れる点を指摘した。彼はこれを直ちに『如実論』に同定はしないが、陳那が *tarkaśāstra* の名の下に具体的な論書を念頭に置き、それに特定の学説を帰しているとした (Tucci 1929: ix-xi)。この仮説を支持し、エーリヒ・フラウワルナー博士 (以下 F 博士と略記) は PSV の蔵訳が示す複数形が正確な翻訳とは限らないとした上で単数形の *tarkaśāstra* に言及する法称の註釈者等の用例を指摘して、PSV

及び法称註釈者等が言及する tarkaśāstra を仏教徒の特定の論書と推定し、これと『如実論』が同一である可能性を示唆した (Frauwallner 1957: 143-146)。

以下この説を検討する。まず、PSV 蔵訳に 2 度現れる rtog ge'i bstan bcos rnams については、PST 第 3-4 章の梵文原典研究を通じ、原語は処格複数形 tarkaśāstreṣu であったことが判明した。さらに、この語が現れる PSV の文脈も以下のように還梵を通じ明確となった (以下の還梵は桂博士グループの研究成果。筆者の責任で変更を加えた部分もある。斜体字部分は蔵訳に基づく推定)。

① PSV ad PS III 1cd: yas tarhi tarkaśāstreṣu anumeyanirdeśaḥ parārthe 'numāne nyastaḥ, sa katham. ta eva hi praṣṭavyāḥ. asmākaṃ tu—tatrānumeyanirdeśaḥ hetvarthaviṣayo mataḥ || (PS III 1cd) (cf. 北川 1965: 127-128)

② PSV ad PS IV 1: trirūpo hetur ity uktam pakṣadharme tu samsthitaḥ | rūḍhe rūpadvayaṃ śeṣaṃ dṛṣṭāntena pradārśyate || (PS IV 1) tarkaśāstreṣu hi pakṣadharmamātram eva prayoge *khyāpyate*, tadyathā *kṛtakatvād ity atra śabdasyeti gamyate*, lakṣaṇaśeṣas tu prayoge 'nuktaḥ. ataḥ *tadarthaṃ dṛṣṭānta ucyate*. (cf. Katsura 2011: 1243; 北川 1965: 239-240)

従来の討論術的伝統に立った『正理門論』までとは一線を画し、PSV は主張命題を能立 (sādhana) とはみなさない。「そこでは推理対象の説示は論証因の目的を対象領域とすると考えられる」(PS III 1cd) は、そうした新機軸を示す言明である。

① はこの言明を導入する文脈に位置し、推論式で主張命題をも能立として立論すべきとする論書として言及されるのが、複数の tarkaśāstra に他ならない。しかし、主張命題を能立とするのは PSV 以前の仏教論理学とニヤーヤ学派等に共通の見解であり、ここでの tarkaśāstra を仏教徒の特定の論書とみなす必要はない。

また ② は陳那が PSV 第 4 章の開始にあたり章の主題たる喩例の定義を説く理由を述べた部分である。「他者のための推理」の内実は三条件を備えた徴表の陳述なので、主張命題の場合と同様に、喩例の定義の必要性に疑問が生じる。これに対し陳那は、伝統的に諸論理学書に依れば推論式の中では論証因支は論証因の第一条件である主題所属性だけを示すものであり、他の二条件を示すのは喩例支でなければならないから正しい喩例の定義が説かれねばならないと回答する。ここでの「諸論理学書」も PSV 以前の論理学書一般を意味していると理解してよい。

さらに F 博士は、Pramāṇavārttikasvayṛtti (= PVSV) と Hetubindu の冒頭で法称が論証因の第一条件たる「主題の属性」(pakṣadharmā) という表現の意義を説明する箇所に対する諸註釈に現れる tarkaśāstra に論及し、それが特定の論書であり、しかも法称が当該箇所では tarkaśāstra から一文を引用している、とした。

法称は問題の一節で、論証因の定義の中で「主題の属性」という表現を用いる

理由を属性保持者の属性 (dharmidharma) という表現と対比しつつ論じる。そして、後者の冗長な定義では何らかの限定 (niyama) が含意される恐れがあるとし、そのような限定が実際に意図されている反復表現のケースを陳那の論証因の定義を例にとって説明するのだが、この部分に対する註釈中に tarkaśāstra の語が現れる。

PVSV 14,8-13: kiṃ punaḥ kvacit tarkaśāstre dr̥ṣṭam niyamārthaṃ vacanam ity ata āha—
sajātiya evetyādi. tatra yaḥ san sajātiye dvedhā cāsaṃs tadatyaye sa hetur (PS III 22 abc') ity
atrācāryiye hetulakṣaṇe **sajātiya eva sattvam ity avadhāraṇena siddhe 'pi vijātiyād vipakṣād**
dhetor vyatireke yad **etad asaṃs tadatyaya iti sādhyābhāve 'sattvavacanam tan niyamārtham.**
ācāryena vyakhyātam **asaty eva nāstitā yathā, syān nānyatra na viruddha iti** (cf. PSV ad PS II
5cd), tathēhāpi dharmivacanam bhāvaniyamārtham āśaṅkyate. (太字は PVSV の pratika, 下
線は PSV からの引用部分。Hetubindu の註も同趣旨。)

F 博士は tarkaśāstre を特定の論書と理解したのだが (Frauwallner 1957: 143)、冒頭の疑問文「さらに時として論理学書では限定のための表現が見出されるのか」は、「一般に論理学書では限定のための表現が必要になることがあり、それを例示するために法称は陳那の論証因の定義に言及するのだ」と説明するための註釈上の修辭と理解すべきである。さらに F 博士は「同類にのみ存在する」(sajātiya eva sattvam) という法称の言明を tarkaśāstra からの引用としたが、これが、陳那の論証因の定義中の「同類において存在する」に限定詞 eva が含意されている、とする法称の見解を示す一文に過ぎないことも、文脈から明らかである。

以上から、陳那及び法称註釈者の言及する tarkaśāstra と『如実論』を関連付ける説に根拠がないことは明白である。しかし他方で、『如実論』の内容に Tarkaśāstra という名称が相応しいのは事実であるので、Tarkaśāstra という固有名を持つ論書が陳那以前に存在した証拠がないことを確認した上であれば、今後も『如実論』の原題として Tarkaśāstra を便宜的に用いることは許容されるであろう。

2. 『如実論』は部分訳か？

『如実論』がインド撰述文献の漢訳であるという経録の記述を疑う理由はない。だが、特異な帰謬論法を論じた「無道理難品」、誤難 (jati) を論じた「道理難品」、敗北状態 (nigrahasthāna) を論じた「墮負処品」という、やや偏った内容を持ち僅か3節からなる現存テキストが部分訳であるという見解で、宇井伯寿博士と F 博士は一致している (宇井 1931: 478; Frauwallner 1957: 107)。『続高僧伝』の達摩笈多伝には彼が西域諸国で二千偈からなる『如実論』を講義したとの記述があり、宇井博士はこれに基づき、現存する『如実論』を原『如実論』の6分の1程度の部分

訳と推定した(『続高僧伝』435b3-12; 宇井 1933: 184)。この記述の信憑性は不明だが、『如実論』には他にも部分訳を疑わしめる幾つかの要素が存在する。

『如実論』の正式題名は『如実論反質難品』であり、3つの節の名称も「反質難品中無道理難品第一」「反質難品中道理難品第二」「反質難品中墮負処品第三」となっている。宇井博士は、これら節の名称が現存『如実論』が原『如実論』の「反質難品」と呼ばれる箇所のみ部分訳であることを示すとす(宇井 1931: 488, 493)。これをどう考えるべきか。

宇井博士も述べるように、『如実論反質難品』という論書の題名は『開元釈教録』(730年)以降に現れたものであり、7世紀以前の経録では『如実論』という題名が記載されているに過ぎず、「反質難品」の語は題名には含まれていなかった(Vassiliev 1937: 1016-1022)。だが、「反質難」の語は、『如実論』以外の漢訳仏典ではほぼ用いられないにも拘わらず真諦訳『阿毘達磨俱舍釈論』には4度現れているので(『俱舍釈論』162b = AKś 3,13; 163b1 = AKś 6,22; 166a = AKś 15,7; 167b = AKś 20,9)、品名として当初から真諦訳の中に存在していた可能性が高い。

『開元録』が、この品名に基づいて『如実論反質難品』という題名を創出したのではないか。従来の『如実論』という題名に「反質難品」という部分が加えられた経緯は定かではないが、写本の冒頭は「如実論」に続いて「反質難品中無道理難品第一」と記されていたと思われ、それが誤って「如実論反質難品」という題名と「無道理難品第一」という品名に分かれ、後に品名に再び「反質難品中」の文字が加えられたという推定は可能である。その場合、第三節の品名は元来は単に「墮負処品」であり、「反質難品中」の部分が誤って品名に加えられた可能性がある。他方、第一節と第二節は当初から「反質難品中無道理難品」「反質難品中道理難品」であったと思われる。というのも、この2節は共に内容的に帰謬との関係が深い。実は上記の『俱舍釈論』に現れる「反質難」の語は全て梵語 *prasaṅga* の訳語であり、『如実論』の品名の「反質難」の原語も *prasaṅga* である可能性が高いからである。他方、「墮負処品」に説かれる「敗北状態」は帰謬とは関係ない。

すなわち、元来「無道理難品」と「道理難品」の2節のみが「反質難品」と呼ばれる部分を構成しており、3つの節の品名も「反質難品中無道理難品」「反質難品中道理難品」「墮負処品」だった、というのが筆者の仮説である。現存『如実論』の品名は必ずしもこの論が部分訳である証拠にはならない可能性がある。

次に、「道理難品」と「墮負処品」は各々誤難と敗北状態を叙述しているが、宇井博士は、その二つが *Nyāyasūtra* (=NS) の十六諦の最後の二つであることから、

『如実論』を NS の十六諦に対応する構成を持った論書の末尾部分の漢訳と推定した。しかし、宇井説では「無道理難品」の位置づけが難しい。原『如実論』が NS と同様の構成を持っていたと仮定した場合、「無道理難」は十六諦の第十四の「詭弁」(chala) に当たると推定するのが自然である。だが、ニヤーヤ学派の詭弁の三分類に相当する内容を「無道理難品」の記述の中に伺うことはできない。以上のように、『如実論』が部分訳であるという説には、それを裏付ける有力な内在的な論拠は乏しい。

ところが近年フランコ博士がキジル千仏洞出土の所謂 Spitzer 写本 (3 世紀) を研究し (Franco 2004: 462-505), 我々の『如実論』理解にとって興味深い事実を発見した。彼は Spitzer 写本の最後の部分に討論術を扱った一連の部分を見出したのだが、この所謂「討論術章」を構成する 3~4 節中の最初の節が『如実論』「無道理難品」との顕著な近似性を示していることを明らかにした (Franco 2004: 465-477)。従来、「無道理難品」の議論は現存文献中に並行事例が見い出されていなかったが、それが Spitzer 写本中に確認されたのである。フランコ博士はさらに、「討論術章」の残りの 2~3 節において、討論術の範疇の列举と敗北状態、及び誤難その他が説かれていたことをも解明している (Franco 2004: 480-505)。つまり現存『如実論』の 3 節のテーマは全てこの「討論術章」中に確認されることになる。しかも、このテキストは『如実論』の 3 節の主題以外の多様な主題を詳論するスペースを持っているようには見えない。

Spitzer 写本は断片資料であり、残存部分に見出されない主題が原テキストに存在しなかったとは断言できないが、そこで論じられている主題が『如実論』の 3 節の主題全てを含んでいることは偶然とは言えまい。『如実論』が Spitzer 写本の「討論術章」と同じ伝統に立脚していた可能性はある。そしてその場合には、『如実論』が原著の数分の一の部分訳に過ぎないという従来の推定は再考の必要があろう。インド仏教の討論術の伝統に、帰謬や誤難そして敗北状態といった討論術の主題を中心的に扱う論書の形態が存在した可能性があるからである。

3. 『如実論』の著者

『如実論』の著者については文軌がこれを世親 (Vasubandhu, ca. 400-480) に帰し、そこに因の三相説が説かれていることを指摘しているが、『如実論』自身には著者名は記されず、中国の古い時代の諸経録にも著者名は示されない。

これに対し、近現代の研究者の中では夙に呂澂氏が PSV 蔵訳の中で批判される

rTsod pa sgrub pa と『如実論』の同一を主張した (呂 1928: 58-59). 今日では rTsod pa sgrub pa は世親の Vādaividhi (= VVi. 論軌) であることが確定しているのので、結果的に呂澂氏は『如実論』と VVi を世親による同一著作と主張したことになる。宇井博士はこの呂澂説を批判したが、今日的視点からは両者の主張は『如実論』を世親撰述とみなす点で一致している。その相異は、前者が『如実論』と VVi を同一と見做すのに対し、後者は両書を世親の二つの別著作と考える点にある。

では宇井博士が『如実論』を世親撰述と考える根拠は何か。まず彼が挙げるのは、世親の後継者である陳那の『正理門論』の誤難説が『如実論』を承けている点である (宇井 1933: 174)。『如実論』から『正理門論』へと至る誤難説の共通性を洞察した宇井博士の議論は、それが VVi を介するものであることが明らかになった今日にあっても、ある意味再評価すべき重要な論点である。しかし、宇井博士が世親撰述説の証拠として強調するのは、何より『如実論』における「因の三相」説の存在である。すなわち『如実論』は、「無道理品」の「同相難」「異相難」の説明に際し、それらが誤難である理由は論者の正当な推論式を論難している点にあるとし、論者の推論式が正しい理由を「我立因三種相是根本法同類所撰異類相離」(『如実論』30c20-21) 等と説明するが、これは文軌が指摘したように「因の三相」を述べたものに他ならない。だが、実兄無著の言及が「因の三相」への仏教徒の最古の言及とされたり、あるいは世親の Vādaividhāna (= VVa. 論式) で「因の三相」説が説かれている、といった論点だけから「因の三相」を説く論書を世親に帰することは、やや早計に見える。宇井博士は他にも、四種道理が説かれていることが『如実論』の世親撰述説を裏付けるとも述べており (『如実論』29b5-11; 宇井 1931: 487)、また、「無道理難品」に、世親の『仏性論』で説かれる数論・勝論を論破する主張と類似・一致する文言があることを指摘している (『如実論』29a6-13; 宇井 1931: 488-490)。最終的に宇井博士は、『如実論』を世親の初期著作とした上で、VVi → 『如実論』 → VVa という著作順序を推定した (宇井 1933: 194)。

なお、「破所楽義」(iṣṭavighātakṛt) の問題は『如実論』の位置づけを考える際に重要である。これは「道理難品」末尾に説かれる五種の正難の第一で、サーンキヤ学派のプルシャ存在論証の推論式「眼等は他者の為のものである。集合したものであるから。寝台等のように。」に対する論難である。この推論式の特徴は本来の論証対象であるプルシャを主張命題中に言表しないことにあるが、それを看破して論駁する正難が「破所楽義」である。後代陳那は、この推論式を「法差別相違因」と呼んで疑似論証因に分類し批判したが、宇井博士はこれと『如実論』の

論難を比較して、後者の論理的未熟を指摘した (宇井 1931: 488, 499-500)。

ところが近年、法称の註釈者達がこの論証が相違因であると指摘した人物として世親に言及していることが判明し (PV IV 32cd への諸註釈)、さらにその出典である『七十真実論』の原文が回収された。『如実論』による批判が「知覚不可能」という別の論点を持ち出してアートマンの存在を否定するのに対し、『七十真実論』はサーンキヤ学派の推論式自体の論理的誤謬を指摘している (渡辺 2007: 64-66)。
『如実論』にない論理的批判を考案したのは世親だったのである。「破所楽義」説の変遷は、世親が『如実論』の思想を発展させた場合があったことを示す。

他方、F 博士は、世親が『如実論』を継承しつつこの論書とは異なる新しい観点から VVi を書いたという見解に立ち、これを以下の点から論証しようとした。

まず誤難論に関しては、F 博士は VVi と『如実論』の議論の近似性を認識していたものの (Frauwallner 1957: 121-128)、それを過大評価はせず、VVi の誤難論が『如実論』のそれを洗練させる形で成立したと考えた (Frauwallner 1957: 129)。しかし F 博士が PST 蔵訳から回収した VVi 断片を梵文原典を用いて改めて『如実論』の記述と比較することで、両論書の誤難論の記述には修辭的表現に至るまで一致する部分が見出されることが判明した。VVi の誤難説の多くの部分が『如実論』のそれとほぼ同文であった可能性が高くなった。しかしまた他方で、若干ではあるが『如実論』にない議論が VVi に存することも改めて確認された。

次に、F 博士は、トゥッチ博士と同様に (Tucci 1928: 626; Tucci 1929: ix-x)、『如実論』が五支作法を用いるのに対し世親は三支作法を採用している、と両者の差異を強調する (『如実論』 35b17-24; Frauwallner 1957: 130)。だが、VVi もまた五支作法を説いていた可能性があり (宇井 1931: 490; 小野 2012)、世親の中に五支作法から VVa の三支作法への理論的展開を想定することも十分可能である。

さらに、F 博士は、『如実論』と VVi が三つの疑似論証因に別の例を与えている点に注目し、その差異の中に思想の発展を見ている (Frauwallner 1957: 119)。

最後に、F 博士が『如実論』を世親に帰せしめない論点として、VVi と VVa で確立された「論議」(vāda) の体系から逸脱した「敗北状態」の叙述が『如実論』に含まれている、という点が重要であるが (Frauwallner 1957: 130)、VVi で論議 (vāda) の体系を確立する以前に世親がそれを論じた可能性もある。

以上の検討から明らかなように、『如実論』と世親の VVi の間には思想的発展が確認される。それゆえ『如実論』と VVi は別著作である。しかし『如実論』が世親撰述であってはならない明確な論拠は確認されない。他方、F 博士に従って

『如実論』を世親撰述でないとした場合、VViの記述のかなりの割合（F博士の再構成に従えば全体の約7割）を占める誤難説について世親が『如実論』から大規模かつ逐語的に引用している事実をどう説明すればよいのか。宇井博士の『如実論』初期世親撰述説はこの問いへの回答となり得る。但しF博士の解明した誤難説の変遷が示すように、『如実論』がVVi以前の著作であることは確実である。

〈一次文献〉

『俱舍釈論』：『阿毘達磨俱舍釈論』大正蔵 29 卷 T 1559。『如実論』：『如実論反質難品』大正蔵 32 卷 T 1633。『統高僧伝』：大正蔵 50 卷 T 2060。『入正理論疏』：沈劍英校補「文軌撰《因明入正理論文軌疏》校補」『因明』第一輯，甘肅民族出版社，2007 所収。AKs: *Abhidharmakośabhāṣya: Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. Patna, 1975. PVSVT: *Pramāṇavārttika(śva)vṛttiṭīkā*. Ed. R. Sāṅkrtyāyana. Allahabad, 1943.

〈二次文献〉

Franco, Eli. 2004. *The Spitzer Manuscript: The Oldest Philosophical Manuscript in Sanskrit*. Vol. II. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Frauwallner, Erich. 1957. "Vasubandhu's Vādaśāstra." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 1: 104-146.

Katsura Shōryū. 2011. "A Report on the Study of Sanskrit Manuscript of the *Pramāṇasamuccayaṭīkā* Chapter 3." *IBK* 59 (3): 1237-1244.

Tucci, Giuseppe. 1928. "The Vādaśāstra." *The Indian Historical Quarterly* 4 (4): 630-663.

———. 1929. *Pre-Diṅnāga Buddhist Texts on Logic from Chinese Sources*. Gaekwad's Oriental Series, no. 49. Baroda: Oriental Institute.

Vassiliev, Boris. 1937. "'Ju-shih Lun'—a Logical Treatise Ascribed to Vasubandhu." *Bulletin of the School of Oriental Studies, University of London* 8 (4): 1013-1037.

宇井伯寿 1931 『印度哲学研究第五』 甲子社書房。

——— 1933 『仏教論理学』 大東出版社。

小野基 2012 「インド仏教論理学における *parārthānumāna* の概念の変遷——その起源をめぐって——」 『印仏研』 60 (2): 1007-1012.

北川秀則 1965 『インド古典論理学の研究』 臨川書店。

呂澂 1928 「集量論釈略抄」 『内学』 4 (4): 1-71.

渡辺俊和 2007 「プルシャの存在論証を巡る論争」 『比較論理学研究』 5: 63-77.

(平成 28 年度科学研究費基盤研究 (B) 15H03155 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 Tarkaśāstra, Vasubandhu, Vādaśāstra, vāda, prasaṅga, jāti, nigrāhasthāna
(筑波大学教授, Dr. phil.)